



宗報

真宗高田派宗務院

第963号

令和8年8月

総務拝命につきまして

総 務 岡 知 道

この度、新内局発足に伴い教学担当総務を仰せつかりました。拝命より幾許か過ぎましたが、日を追うごとに関係者皆様の御苦勞と、宗務執行を当たり前のように考えていた自身の浅はかさを痛感致しまして、愈々身の引き締まる想いを嘯みしめております。

栗原総長は、先の議会及び宗報に於いて表明されました通り「弥陀のよび声『なもあみだぶつ』を聞いてゆこう」を宗門運営の基本理念とされ、「伝統の継承と創造的發展」を旗印として「宗務中期計画」を立ち上げられました。すなわち、①教化活動の充実と現代化、②文化財の保護と活用、③真宗高田派教義の明確化と教学研究の振興、④僧侶養成と研鑽の場の充実、⑤宗務財政の構造改革、以上【五本の柱】であり、これらを常にたずねつつ奉職に与りたく存じます。

私は、先日まで教学院第三部に研究員として一隅を許されておりました。御存じの通り第三部会は「僧侶の養成並びに研修に関すること」を担当する部会であり、大河戸主任のもと、忝く多くの学びを授かりましたが、今でも思い出されますのは所属間もない頃、「布教伝道研修講座」という、御法話お取次ぎの講習に際した時の事です。

そのカリキュラムの中では、受講者が一生懸命に紡がれた御法話原稿を味読して、研究員が感話を返信するのですが、時には御法話の内容に対して訂正・修正を指導する事もあり、私には他者のお味わいを否定し、自身の想いを押し付けているような気がして、これで良いのだろうかと主任にたずねた事がございました。その時主任から「これは『教えてあげている』ではなく、こちらが『学ばせていただいている』という事を忘れてはいけないよ」と、厳しくもあたたかくお育て頂きました。

このように「してあげる」を好む私ですが、お念佛に我が身を照らされつつ、共に御教えを聞く皆様に「学ばせて頂きたい」と存じます。どうか、より一層の御指導、御鞭撻を賜り、宗門護持振興にお力添え賜りますようお願い申し上げます。

宗 達

宗 達 第一二四二号

法主殿来る令和八年九月二十三日讃佛会に御親教相成る

令和八年七月八日

法主鈴印

宗務総長 大僧都 栗 原 廣 海

宗 達 第一二四三号

法主殿来る令和八年十一月二十日午後一時三十分より真宗高田派専修寺福井別院報恩講に御親修御親教相成る

令和八年七月九日

法主鈴印

宗務総長 大僧都 栗 原 廣 海

宗 達 第一二四四号

真宗高田派宗制七十九条第二項により令和八年九月二十九日 第一八六宗議会を召集せらる

令和八年七月十六日

宗務総長 大僧都 栗 原 廣 海

法主鈴印

宗 達 第一二四五号

法主殿来る令和八年十月三日、四日真宗高田派専修寺北海道別院報恩講に御親修御親教相成る

令和八年八月十日

宗務総長 大僧都 栗 原 廣 海

法主鈴印

宗 達 第一二四六号

法主殿来る令和八年十二月五日午後一時より真宗高田派専修寺横浜別院報恩講に御親修御親教相成る

令和八年八月十八日

宗務総長 大僧都 栗 原 廣 海

法主鈴印

宗 告

宗 告 第一二〇九号

来る令和八年九月二十日より同二十六日まで讃佛会執行相成る
令和八年七月八日

宗務総長 大僧都 栗 原 眞
総 務 少 僧 都 岡 栗
総 務 少 僧 都 岡 栗
眞 原
廣 恵 知
海 光 道

宗 告 第一二一〇号

来る令和八年十一月三日より同四日まで納骨堂法会執行相成る
一、日 時 三日、四日

納骨堂 午前十時三十分
御影堂 午前十一時（洪鐘撞止）
一、参 勤 者 一般寺院
一、衣 体 色衣、紋章五条袈裟、差袴着用
令和八年七月八日

宗務総長 大僧都 栗 原 眞
総 務 少 僧 都 岡 栗
総 務 少 僧 都 岡 栗
眞 原
廣 恵 知
海 光 道

宗 告 第 二 一 一 号

来る令和八年十一月五日より同十日まで秋法会執行相成る

一、新加入法会 五日、六日、七日

一、参 勤 者 一般寺院

一、衣 体 色衣、紋章五条袈裟、差袴着用

令和八年七月八日

宗務総長

総 務

総 務

大 僧 都

少 僧 都

少 僧 都

栗

栗

岡

原 眞

廣 恵 知

海 光 道

宗 告 第 二 一 二 号

来る令和八年十一月八日より同十日まで資堂講法会執行相成る

令和八年七月八日

宗務総長

総 務

総 務

大 僧 都

少 僧 都

少 僧 都

栗

栗

岡

原 眞

廣 恵 知

海 光 道

任 免

令和八年四月三十日

依請解其職

會計監査委員

内田 勝久

令和八年五月三十一日

依請解其職

神戸別院評議員

伊藤 彰

全

佐野 輝夫

全

一尾 隆志

全

小崎 清秀

神戸別院理財員

佐野 輝夫

令和八年六月一日

神戸別院評議員を委嘱する

神戸別院世話方

水井 健次

全

玉村 利昭

神戸別院婦人部

佐野いつ子

全

中瀬 紀子

神戸別院理財員を委嘱する

神戸別院評議員

玉村 利昭

令和八年六月二十六日

監正局委員を命ずる

欣念寺住職

権中僧都

田中 明誠

正法寺住職

律 師

谷口 光曉

蓮珠寺住職

律 師

安藤 純海

専福寺住職

権大僧都

金森 顕宏

令和八年七月二十七日

高田派並専修寺會計監査委員を委嘱する

玉保院檀信徒

森川 正樹

組長交代

令和八年三月三十一日

依請解其職

愛知第四組組長

近藤 康成

令和八年四月一日

愛知第四組組長を命ずる

明德寺住職

柴田 智恵

住職拝命

令和八年七月一日

新潟県十日町市浦田

補 常照寺住職

常照寺衆徒

丸林 礼祥

令和八年七月二十九日

滋賀県甲賀市水口町松栄

補 蓮華寺住職

蓮華寺衆徒

久我 義孝

依請解其職

蓮華寺住職

久我 義範

三重県津市川方町

補 栄松寺住職

栄松寺副住職

福岡 由香

住職代務者

令和八年七月三十日

東京都府中市多磨町

東京都八王子市東中野
補 善徳寺住職代務者

永福寺住職

藤尾 忠洋

寺院設立

令和八年七月一日

新潟県十日町市浦田

常照寺設立を許可する

代表役員

丸林 礼祥

僧階

令和八年七月二十九日

任 大律師

権少僧都 少僧都

任 大律師

権少僧都

身分堂班

令和八年八月一日

列 其身一代堂班

老分一等

院家二等 院家一等

院家首席二等 院家首席一等

准上座格三等

栄松寺住職

福岡 由香

学階

令和八年六月二十二日

授 助教

令和八年六月二十五日

授 助教

北畠 大道

若林 妙百

布教任命

七月御影堂常在説教（晨朝）

七・一

七・二

七・三

七・四

七・五

七・六

権中僧都

権大僧都

中僧都

権中僧都

権中僧都

少僧都

鷲山 了悟

戸田 栄信

青木 義成

藤浦 弘導

栗廻 隆興

久野 俊彦

七・八	大律師	松谷	慧光	七・三〇	權中僧都	藤浦	弘導
七・九	中僧都	佐藤	弘道	七・三一	律師	北畠	心淳
七・一〇	中僧都	南部	義幸	七月御影堂常在説教（逮夜・日中）			
七・一一	律師	田中	唯聰	七・八	律師	水谷	忍英
七・一二	律師	松山	智慧	日中	權少僧都	高藤	英光
七・一三	律師	富田	健自	七・九	逮夜	權大僧都	弓削
七・一四	權中僧都	中村	宣成	七・一〇	日中	龍池	弘胤
七・一五	權中僧都	松山	智道	七・一五	逮夜	律師	宏昭
七・一六	權中僧都	生桑	崇等	七・一六	日中	權少僧都	高藤
七・一七	權中僧都	三井	蓮孝	至心院殿一周忌法会			
七・一八	權中僧都	田中	明誠	七・六	逮夜	權中僧都	田中
七・一九	大律師	北畠	大道	七・七	晨朝	少僧都	千草
七・二〇	律師	隆	妙灑	七・七	日中	權大僧都	弓削
七・二一	權中僧都	中村	宣成	八月御影堂常在説教（晨朝）			
七・二二	權大僧都	弓削	弘胤	八・一	權中僧都	栗眞	光暁
七・二三	權中僧都	上杉	祥樹	八・二	中僧都	青木	義成
七・二四	權大僧都	松田	信慶	八・三	權中僧都	中村	宜成
七・二五	大律師	高島	光憲	八・四	權大僧都	戸田	栄信
七・二六	權大僧都	浦井	宗司	八・五	權中僧都	栗廻	隆興
七・二七	大律師	富山	翔眞	八・六	中僧都	佐藤	弘道
七・二八	律師	的屋	宝海				
七・二九	律師	隆	妙灑				

八・七	律師	隆	妙灑	八月御影堂常在説教（逮夜・日中）		律師	水谷忍英
八・八	律師	田中唯聴	八・七			律師	高藤英光
八・九	律師	富田健自	八・八			律師	高藤英光
八・一〇	權中僧都	藤浦弘導	八・九			權少僧都	高藤英光
八・一一	權中僧都	上杉祥樹	八・一〇	逮夜	權大僧都	弓削弘胤	弓削弘胤
八・一二	律師	北畠心淳	歡喜會説教		權中僧都	驚山了悟	
八・一三	律師	中元誠美					
八・一七	權中僧都	三井蓮孝	八・一四	晨朝	權中僧都	岡知道	
八・一八	大律師	北畠大道	日中	權中僧都	栗原隆興		
八・一九	大律師	高島光憲	八・一五	晨朝	權中僧都	栗原隆興	
八・二〇	大律師	松谷慧光	日中	權中僧都	栗原隆興		
八・二一	律師	的屋宝海	八・一六	晨朝	律師	隆妙灑	
八・二二	權中僧都	田中明誠	日中	少僧都	栗真惠光		
八・二三	少僧都	久野俊彦	高田慈光院 月例法会		中止		
八・二四	律師	龍池宏昭					
八・二五	權大僧都	松田信慶	七・一〇	少僧都	藤澤真樹		
八・二六	權中僧都	中村宣成	七・一六	權中僧都	村上英俊		
八・二七	權大僧都	弓削弘胤	七・二六	權中僧都	隆妙灑		
八・二八	律師	若林妙百	八・一〇	律師	隆妙灑		
八・二九	中僧都	戸田惠信	八・二六	律師	隆妙灑		
八・三〇	權中僧都	田中明誠	報徳園 月例法会		權少僧都	高藤英光	
八・三一	律師	吉尾真祐					

敬 弔

次の方々が御往生なさいました。謹んで敬弔の意を表します。

令和八年

六・二十四

福井県坂井市三国町覚善

鳳生寺前坊守

天井喜美枝

八・十一

三重県津市中村町

西生寺住職

齋藤 妙慧

贈 大 律 師

お詫びと訂正

宗報第九六二号（令和八年六月）の記事内におきまして誤りがございました。ここに謹んでお詫び申し上げ、左記のよう
に掲載並びに訂正させていただきます。

正

九頁

補 専修寺総代

厚源寺檀信徒

内田 勝久

補 専修寺総代

厚源寺檀信徒

内田 勝久

誤

十七頁

五・五 三重県鳥羽市鳥羽

本照寺前住職

安部 信清

五・五 三重県鳥羽市鳥羽

本照寺前住職

安部 信清

贈 大僧都

贈 権大僧都

二十頁（下から二行目）

総務 少僧都 栗真 恵光
総務 少僧都 岡 知道

総務 小僧都 栗真 恵光
総務 小僧都 岡 知道

宗門のお知らせ

至心院殿一周忌御香儀芳名

至心院殿の一周忌に際しましては、高田派御寺院様より鄭重なる御弔慰並びに芳志を賜り有難く厚く御礼申し上げます。お蔭を以ちまして諸法事万端滞りなく如来堂にて厳修させていただきました。ここに御香儀賜りました御寺院様の寺号を記し謝意と共に御礼申し上げます。

なお、御同行・一般の方々よりも御芳志を賜りました。宗報への掲載は割愛させていただきます。何卒ご了承くださいますようお願い申し上げます。

本寺専修寺
京都別院
神戸別院
関東別院
横浜別院
兼帶所 如来寺

三重第一組西部

智慧光院 玉保院

三重第一組東部

成願寺

三重第二組甲東部

大門寺 善行寺

満願寺

三重第二組甲西部

浄光寺

三重第二組乙部

願正寺

三重第三組

本徳寺 光澤寺

深正寺

善徳寺

上宮寺

三重第四組

善休寺 慈相寺

三重第六組北部

唯称寺

三重第六組東部

法性寺

宗門のお知らせ

三重第六組西部

西方寺 青巖寺

三重第八組

迎接寺 明通寺

三重第九組西部

圓淨寺 善福寺

三重第十組

延寿寺 因誓寺

三重第十一組東部

西光寺 柳含寺

三重第十一組西部

福専寺

三重第十二組東部

安楽寺

三重第十四組

報国寺 宝林寺

法光寺

三重第十五組

善性寺 誓昌院

法善寺

西林寺

西蓮寺

三重第十六組北部

光善寺

三重第十七組北部

西岸寺

三重第十七組南部

教安寺 心光寺

願正寺

三重第十八組

崇顕寺 成満寺

三重第二十組

万性寺 顕正寺

誓覚寺

三重第二十一組東部

信福寺 真永寺

三重第二十二組東部

西運寺

三重第二十四組甲西

要泉寺

三重第二十五組北部

専照寺

高山寺

宣隆寺

欣浄寺

誓元寺

立法寺

中山寺

唯願寺

西法寺

宗門のお知らせ

三重第二十六組

本覚寺 正圓寺

海念寺

常寶寺

北海道

専誠寺

弘専寺

浄光寺

三重第二十七組

妙華寺

講社

御飯講

三重第二十八組

光明寺

関係機関

高田福祉事業協会

愛知県第七組

聖眼寺

愛知県第八組

西光寺

大阪府

大乘寺 正覚寺

和歌山県

崇賢寺

福井県第二組

稱名寺（折立）

東京都

願信寺 永福寺

神奈川県

甚行寺 空乗寺



第百回 仏教文化講座報告

本年も大変暑い中、法主殿、法嗣殿のご臨席を仰ぎ、多くの聴講の皆様を迎えて、第百回仏教化講座が開催されました。

講師の先生方と講題、講義の概要は次のとおりでありました。

八月一日

法主殿御親講

「堯猷上人の生涯と事蹟」

御親講ではまず、堯猷上人の幼名は鶴松と申され、父が近衛忠房であることは確かであるものの、生母は確定できず、堯猷上人の兄、長男は近衛篤麿、そして次男は津軽家に養子に入った英麿で、その弟が鶴松であるのですが、この英麿・鶴松の兄弟関係等、はっきりしない点が極めて多い、と申されました。その理由として、時代的制約と、

屈指の特権階級であった近衛家の特殊事情も反映されていたのであろうと述べられ、本日の講義は、鶴松の兄・篤麿と英麿の生涯についても合わせて紹介してみたい、と言われました。

そして次に、「近衛篤麿の生涯」と題されて、まず、兄篤麿の幼少期、青年期が紹介されました。篤麿の留学については、近衛家による私費留学ではなく、近代日本の指導者としての期待を背負った国費留学であった、と言われ、篤麿はオーストリアから間もなくドイツに移るのですが、ここに「近衛家の留学先はドイツ」という規範が生まれることになった、と言われました。

次に、「津軽英麿の生涯」と題されて、鶴松のもう一人の兄である津軽英麿の生涯について紹介されました。英麿は、わずか五歳にして津軽家へ養子に入りますが、津軽家と近衛家の関係が歴史的にも濃厚であった、と言われました。

兄の篤麿が弟の英麿について書いた手紙と、英麿が冷静に自己分析している文章によりますと、甘やかされて養育された英麿であったことがわか

るのですが、その英麿も十八年間に及び留学によって、学問的にも人間的にも完成した、人の上に立つに相応（ふさわ）しい、信頼に足る青年に成長したのであった、と述べられました。

そして次に、「常磐井堯猷の生涯」と題されて、その幼少期の「鶴松」についての記録はないものの、兄英麿同様に近衛家本家で手厚く養育されたことは確かである、と述べられました。鶴松の専修寺入寺は正式には明治十八年（一八八五）ですが、それに先立つ十年近くも前、明治九年（一八七六）にはその確約がなされていたようで、これは英麿の津軽家入室の前年、鶴松四歳の時であった、と言われました。明治十三年（一八八〇）には、病氣療養のため関西に赴こうとしていた兄篤麿がその途中で、一身田に寄り、鶴松と面会、共に伊勢参宮したとあるので、この頃は主に伊勢一身田で勉強していたことが解る、と述べられました。

専修寺の蔵には、鶴松の貫練教校、東京師範附小時代の答案やノートが多数残っていて、広汎な

授業が行われていたことが解りますし、鶴松も多方面に関心があり、勉強好きだったように見受けられる、と言われました。興味深いのは、「修身筆記」というノートの末尾に「独逸学生会徒近衛」とあり、心は既にドイツにあったのであろう、と申されました。

兄篤麿の懇ろなすすめもあって、いよいよ念願のドイツ留学に旅立つこととなりますが、鶴松のドイツ留学は、二通の手紙によって始まり、この二通の手紙に集約されている、と言われました。その一通が鶴松が明治十九年（一八八六）三月九日に義父堯熙（ぎょうき）に宛てた留学懇望状であり、もう一通の手紙は、篤麿の明治十八年（一八八五）十月三日付け祖父近衛忠熙宛ての手紙であった、と言われました。

また、留学の航海中の様子や、留学先での様々な出来事も詳しく紹介されました。

堯猷上人は、京都帝大講師も勤められ、大正二年（一九一三）に法主就任、百年前の八月一日より仏教文化講座を始められ、三兄弟の中では唯一

長寿を保ち、昭和二十六年（一九五一）一月二十七日に八十歳で亡くなりました。

なお、最晩年の堯猷上人は、学問にも法務にも極めて真摯であった、と言われました。最後に、「近衛三兄弟の遺したもの」と題されて、三兄弟を支えられた方々の名前を挙げられて、三兄弟が我々に遺してくれたものは、人の恩の深さ、重さ、尊さであったに違いない。と結ばれました。

八月二日

国際仏教学大学院大学特任教授

東京大学名誉教授

「観音と観自在

齋藤 明 先生

―堯猷上人による開講百年を記念して―

齋藤先生は、配付資料に添って講義をされました。

まず、「観音（観自在）のルーツと『梵天勧請』説話」と題されて、観音（観自在）の原語は、

サンスクリット語で表記すれば、「観察すること自在な「菩薩」の意味であり、玄奘や玄奘（げんのう）が適切に論及したように、インド語の意味に照らすかぎり、適切な訳語は「観自在」であって、「観音」ではない、と言われました。

ただ個人的には、「観音（かんのん）」という音の響きがいい、とも申されました。

また、「観自在」の起源は、梵天勧請を受け、悲心により仏眼をもって世間を観察した仏陀による「世間観察」にある、と言われました。

次に、『法華経』（観音経）と観（世）音菩薩、と題されて、『法華経』（観音経）にある「善男子よ、もし無量百千萬億の衆生がいて諸の苦惱を受けたとしても、この觀世音菩薩を聞いて、一心に名を称えるならば、觀世音菩薩はただちにその音聲を観じて、みな解脱することを得させるであろう。」という翻訳は、鳩摩羅什が、意図して付加した箇所であると、言われました。また、鳩摩羅什は思想家であり、玄奘は研究者であるとも申されました。

斎藤先生は、「『観音』と言うが、音は、見るの
じゃなく、聞くものでしょう」とも言われました。

「でも、大事なものは、そのエッセンス（本質）で
すから、観音という名前は、捨てがたいと思いま
す」と言われました。

講義後の質疑応答の中で斎藤先生は、「苦しい
時に助けに来てくれるという、そういう直接的な
言葉だけが念頭に浮かぶかも分かりませんけど
も、法を説くことがその原点で、法を説くこと
によって、結果として様々な形の救いがある」と
言われました。

今回のテーマである「『観音』と『観自在』」に
ついて、『法華経』、『華嚴経』、それから『無量寿
経』、『観無量寿経』も皆、基本的に「観世音」で、
「世」が無かったりすることもあります。一方、「観自在」とい
うのは、定着しだすのは、やはり玄奘三蔵の影響
が大きいところで、七世紀以降になる。もし言葉
の上で厳密に言えば、「観世自在」と言った方が
当たっているだろう、ということを抑られました。

八月三日

慶應義塾大学名誉教授

関西外国語大学国際文化研究所元所長

野村 亨 先生

「東南アジア仏教の諸相―上座部仏教と密教―」

野村先生も配付資料に添って話をされました。

まず最初に、高田派本山とご自身の野村家との
関係について話されました。それは、野村先生の
祖父と堯猷上人とのご関係でありました。

続いて、「インド哲学と仏教」について、話さ
れました。

インド哲学の最高峰が、ウパニシャッド、奥義
書と呼ばれるもので、「梵我一如」、これが一番基
本的な概念で、梵と我、ブラーフマンとアートルマ
ンが、永遠不変、という考えである。ところが仏
教では、永遠不変なるものは無いと説きます、と
言われました。

次に、「仏教の成立と展開」と題されて、学生
や外国人から、仏教とはどういう教えですかと質

問されることがありますが、それを各寺院で質問すると、ご自分の宗旨の話をされて、みな違っていて、おおもとの仏教についてははっきりと話をされないことが多いということを問題にされました。

そして、もし私なら、おおもとの仏教について、このように話しますと、仏教の基本概念を、分かり易く説明していただきました。

その後、仏教のエッセンスを含んだすばらしいものとして、「いろは歌」を取り上げて、その内容を詳しく説明していただきました。

そして続いて、「お釈迦さま亡き後の仏教の展開」について話されました。

それは、上座部と大衆部に別れての根本分裂、多くの部派に別れての部派仏教、「その後の仏教の流れとして、大きく三つあります」と話されて、南方上座部仏教、チベット仏教、大乘仏教の説明をしていただきました。

さらに、南方上座部仏教の東南アジアへの伝播と、その教えについて説明していただきました。

「南方上座部仏教は、個人主義であり、個人の徳は積むが、他者への回向という考えは無い」と言われました。

そして最後に、密教の成立と伝播について、説明していただきました。

八月四日

武蔵野大学教授

碧海 寿広 先生

「西洋の仏教との出会い―高楠順次郎と常磐井堯猷」

碧海先生も配付資料に添って話を進められましたが、まずはじめに「近代における『人間釈尊』理解の成立」と題されて、「人間釈尊」中心の仏教観が普及したこと、西洋近代的仏教学が提示した「脱神話化された歴史的人物としての釈尊」が日本に逆輸入され定着したこと、などが紹介されました。

次に、「廃仏毀釈から世界の仏教へ」と題されて、廃仏毀釈の影響、明治維新期の危機感から、

①国家主義（国体論・天皇制ナショナリズム）への接近と、②西洋の知性・最新学術（思想、哲学、進化論等）という二方向への展開があったことを説明され、高楠も含め、様々な人物の動向が紹介されました。

次に、「西洋における近代仏教学誕生とその特徴」と題されて、近代仏教学の二大特徴として、①文献学的・客観的アプローチと②合理主義による「脱神話化」の二つを挙げられました。

次に、「高楠順次郎と『西洋の仏教』」と題されて、高楠は、オックスフォード大学で学び、西洋学術を修得し、帰国後は東京帝国大学等で研究・教育基盤を確立したこと。また、『大正新脩大藏經』の編纂など、出版事業による普及や、ラジオ講座等によって、西洋的・脱神話化された釈尊伝を一般社会へ浸透させたことが紹介されました。

次に、「常磐井堯猷の相克と葛藤」と題されて、まず、堯猷上人が専修寺に入られたことや、ドイツ留学、師事したロイマンのこと、そのロイマンと高楠とのつながり、また、サンスクリット語を

研究し、「須磨提女経」の研究で哲学の博士号を取得されたこと、さらに帰国後の堯猷上人については、法主殿が一九九三年に書かれた論文や、父・堯猷上人について述べられた堯祺上人の文章などが紹介されて、堯猷上人を偲ばれた。

最後に、「西洋と東洋の重層・そして現代へ」と題されて、高楠は、インド現地での体験を通じ、西洋的な文献学に留まらない「アニミズム（一切衆生悉有仏性）」や「崇高なヒマラヤのごとき釈尊像」を重ね合わせて、独自の仏教観を確立されたことが紹介されました。

八月五日

真宗高田派鑑学

高田短期大学名誉教授

栗原 廣海 先生

「仏教文化講座 百年の歴史と今後の展望」

栗原先生は、まず冒頭で、仏教文化講座の歴史は、「学問の方法、教団と社会の関係、戦争と平

和、死生観、科学、文化財、そして、YouTubeでの配信など、今日までに少しずつ形を変えてきていますが、変わらなかった一点、それは何かと言いますと、教えを受け継ぐには、私たちの、たゆまない学び、学びの姿勢というものが不可欠である、ということではないかと思えます。」と述べられました。

そして、用意をされた三つの資料、「仏教文化講座 百年の歴史と今後の展望 聴講者配付資料」、「第百回文化講座 法主御訓示と主監挨拶」、「仏教文化講座 講師・講題一覧」に基づいて話を進められました。

最初に、聴講者配付資料にある「略年表」によって、「安居」から「仏教文化講座」への変遷が紹介されました。一六七二年、高田派で最初の安居が行われ、一七九六年になると、増える学徒に対応して、勸学堂が建立されます。一九一五年（大正四年）には、安居が講究結衆に解消されて、試験制度が導入されます。そして、一九二五年（大正十四年）に「仏教文化講座規定」（全十条）が

裁可されて、一九二六年（大正十五年）八月一日から十日まで、第一回の仏教文化講座が始まりました。「規定」の中に、ご法主のご親講も書かれていて、第二回よりご親講が始まり、さらにその第二回の初日に高田学会が創立されたことなど、また、「安居」から始まってからの、その「安居」の内容、そして、一九一五年に「講究結衆」に改称された経緯など、詳しく説明していただきました。さらに、仏教文化講座でご法主がご親講されることについては、「安居では、本願寺派も大谷派でも、ご法主が講義をされることはありませんことです。しかし、この仏教文化講座においては、ご法主自らご親講されるという、聴講者、門信徒にとりましては、本当にこの上ない喜びとして受け止められたに違いない。」と述べられました。さらに、第一回の出席者数や法服についても、「申し込み者が三百五十人を超えたと言われております。最終的な聴講券は、四百枚に達した。内訳は、住職、衆徒、つまり僧侶が、二百九十五名。門信徒が四十八名。各宗派三十一名。その他二十

六名。さらに、西洋服の上に着用できる新しい法服というものが、この時に制定されます。」と紹介していただきました。

開講式についても、式の順序やその内容が紹介されて、「この講座が、ご法主を学問的な中心としながら、内外の研究者が集う公的な学問の場であるということを、目に見える形で示す、そういう儀礼だったのではないかと考えられるわけです。」と述べられました。

その後、配付資料にある「第一回の開講式におけるご法主の訓示」を読みあげられて、「いかにその学問研究ということにご法主自身が熱心であったかということ。そして、派内の主に僧侶だと思いますが、その学問研究にしっかりといたしまねばならぬという、そういう強い励ましの思いというものを含まれているように拝察するところでございます。」と言われ、さらに閉講式のご訓示も拝読されて紹介されました。

休憩後は、まず、第一回目の十日間の日程と、講師とその内容について、詳しく紹介されました。

また、松山忍明師の講義内容については、組長会議で、布教師の立場に立った玉置諦聴師から懸念が述べられたことも紹介され、さらにその点から、学問と信仰との関係は、今に通じる課題であることが述べられました。

その後、第百回までの仏教文化講座を七期に分けられて、それぞれの特徴を挙げられながら、その変遷を辿られました。

最後に、高田派の『親鸞聖人正明伝』を取り上げられて、今までの学問分野において、この『正明伝』がどのように評価されてきたかを紹介され、さらに、第一回の主監をされた長井眞琴博士の学問的姿勢も紹介されながら、「そのところはやはり、その信仰と学問というところでですね、実証的な学問というところでの葛藤と申しますか、大変難しいところがありますので、私どもも今後ともしっかりと留意して、こういう問題には向き合っていかなければならないという風に考えております。」と結ばれた。

本年も各分野の先生方をお招きして、広い視野からのお話しを伺うことができました。この五日間をご縁として、仏教文化講座が果たす役割を再認識するとともに、自らの今後の歩みに様々な示唆を与えていただきました。

来年の文化講座は第一百一回となり、百年という歴史を背景とした新たな一歩が始まります。学びの可能性に期待が膨らみます。

(仏教文化講座主監 松山 智道)

全国組長会報告

全国組長会が令和八年六月十八日(木)午前十時三十分より宗務院二階第一会議室にて開催され、全国各地より五十三名の出席がありました。

法主殿のお言葉後、宗務総長挨拶、宗議会報告が行われました。続いて庶務・教学等各部署から各種案内後、質疑応答がありました。

第五十三回

住職補任研修会実施のお知らせ

標記の件につきまして、住職・住職代務者・副住職規程(宗規第十七号)により、住職補任研修を受講することが、住職及び副住職補任申請の必須条件です。

住職及び副住職を拜命予定の皆様は、早めに受講いただきますようご案内いたします。

なお、教師資格を取得された方が対象となります。

研修予定日

令和八年

十月八日(木) 十二時頃

九日(金) 十二時十五分頃、解散予定

研修内容

- ・ 真宗教義と高田派の歴史
- ・ 住職道、布教道
- ・ 宗教法人法
- ・ 寺院規則
- ・ 声明
- ・ 法式作法

~~~~~ 宗門のお知らせ ~~~~~

## 申込み方法

定員

二十名（定員になり次第受付終了）

詳細は宗務院教学課までお問い合わせください。

二五  
一四  
一〇  
一一  
四

三重県津市一身田町二八一九

真宗高田派宗務院教學課 宛

(TEL 〇五九—二三二—四一七一)

(FAX 〇五九一三三一四一四)

## 令和八年度 第三十一回

# 教学院研究発表大会案内

# 孝子陈有年墓表

日時 令和八年十月三十日（金）

開講式  
午前十時

会場 高田会館ホール

一. 研究発表 十時二十分頃

① 真宗の葬儀（寺院葬儀からその味を考える）

第三部会 戸田恵信

② 自死相談活動における真宗の実践の研究

第一部会  
中川結幾

### ③ 子どもの居場所づくりについて

第二部会 岡 理重

④『愚禿鈔』をめぐって

第四部会 佐波 真

二・特別講演

十三時三十分

テーマ 「一光三尊仏について」

— 真宗高田派と善光寺式阿弥陀三尊 —

講師 瀧川和也 氏(三重県総合博物館学芸員)

閉講式

午後三時頃

どなたでも自由に聴聞できます。

僧職の方は布袍・輪袈裟を着用してください



教学院公開講座案内

令和八年度 第二回

聞思の集い

日時 令和八年十一月二十七日(金)

午後一時半

午後三時四十五分まで

会場 高田会館ホール

テーマ 和語聖教から窺う、親鸞聖人のおこころ  
講師 葛野洋明 師(龍谷大学大学院教授)

どなたでも自由に聴聞できます。

僧職の方は布袍・輪袈裟を着用してください

本山行事予定

(九月・十月)

九月 十日 第三十二回法話発表会

九月二十日

二十六日 讃佛会

十月 八・九日 第五十三回住職補任研修会

十月 十五日 第七十九回檀信徒研修会

十月 三十日 第三十一回教学院研究発表大会



下付金のお知らせ

令和二年度分院号下付金、及び納骨壇加入下付金を専修寺正味財産に計上いたしました。

(令和八年五月三十一日付)

院号冥加金、及び納骨壇加入冥加金の下付金は納入された年度から、五年を経過したものは、専修寺正味財産に計上されるため、交付出来ませんのでご注意ください。

詳しくは宗務院財務課までお尋ね下さい。

## 令和 9 年「お七夜竹あかり」協力をお願い

令和 9 年報恩講(お七夜)期間中の 1 月 9 日～15 日に、報恩講参拝奨励行事として「お七夜竹あかり」を開催します。テーマを「竹あかり～やすらぎの光～」とし、みんなの竹あかりで極楽浄土を表現するというコンセプトのもと、応募のあった作品ひとつひとつを境内いっばいに並べ、お浄土の光を表現します。この竹あかりをご縁に、報恩講へ多くの方が参拝していただき、報恩謝徳の心を伝えていきたいと考えております。つきましては、ご寺院よりご協力を賜りたくお願い申し上げます。

### 1、寺院協賛竹あかり【協賛金額（特典）】

|                     | 50 万円       | 30 万円       | 10 万円                  | 5 万円          | 1 万円 |
|---------------------|-------------|-------------|------------------------|---------------|------|
| 名前                  | 竹に直接名前を彫刻   |             | 印刷したものをラミネート加工して竹に貼り付け |               |      |
| 竹の本数                | 17 本        | 7 本         | 5 本                    | 4 本           | 1 本  |
| サイズ 高さ              | 80cm<br>～3m | 80cm<br>～3m | 60cm<br>～1.7m          | 30cm<br>～1.2m | 1 m  |
| Web 特設ページ協賛名        | ●           | ●           | ●                      | ●             | ●    |
| Web 特設ページ<br>HP リンク | ●           | ●           | ●                      |               |      |
| 開催チラシ協賛名            | ●           | ●           | ●                      | ●             | ●    |
| 報恩講しおり協賛名           | ●           | ●           | ●                      | ●             | ●    |
| 初夜 中陣参拝             | ●           | ●           | ●                      |               |      |
| 非時共通券               | 50 枚        | 30 枚        | 10 枚                   | 5 枚           | 1 枚  |

### 2、寺院取りまとめ竹あかり【申し込み手順】 参加志 1,000 円／1 作品

- ① 作品用紙に寺院名と参加者のお名前を記入して作品を完成させてください。
- ② ご寺院で取りまとめいただき、申し込み用紙、作品用紙、参加志を竹あかり実行委員会まで提出してください。

※寺院名を記載した竹あかり(1m)を無料で設置します

※作品用紙はホームページより印刷してお使いいただくか、宗務院にもご用意がございます。

**詳しくは専修寺ホームページ竹あかり特設ページをご確認ください。**

真宗高田派本山専修寺内 竹あかり実行委員会

Mail : bamboo-illm@senjuji.or.jp

TEL 059-232-4171

FAX 059-232-1414

真宗高田派共済会のご案内

●全寺院対象の共済制度●

真宗高田派共済会運営規程による各種制度

○見舞金

- ・ 本堂全焼及び全壊 1 0 0 万円
- ・ 本堂半焼及び半壊 6 0 万円
- ・ 庫裏全焼及び全壊 6 0 万円

\* 災害を証明する書類が必要

・ 境内地並境内建物が災害を被った時は、2 万円をお見舞いする

\* 被害総額が100万円以上の場合となります

○祝金

- ・ 本堂新築及び改築 6 0 万円
- ・ 本堂を除く境内建物の新築および改築 1 0 万円

\* 工事費が1 千万円以上の場合となります

\* 高田派代表役員が発行した新築・改築の承認書と  
工事契約書の写しが必要

○住職退職慰労金（住職の死亡から6 ヶ月以内に申請のこと）

在任期間により給付金が異なります

- ・ 住職在任8 0 年以上9 0 年未満 9 0 万円
- ・ 住職在任7 0 年以上8 0 年未満 8 0 万円
- ・ 住職在任6 0 年以上7 0 年未満 7 0 万円
- ・ 住職在任5 0 年以上6 0 年未満 6 0 万円
- ・ 住職在任4 0 年以上5 0 年未満 5 0 万円
- ・ 住職在任3 0 年以上4 0 年未満 4 0 万円
- ・ 住職在任2 0 年以上3 0 年未満 3 0 万円
- ・ 住職在任1 0 年以上2 0 年未満 2 0 万円
- ・ 住職在任1 0 年未満 1 0 万円

○香料（退職から6 ヶ月以内に申請のこと）

上記住職退職慰労金を適用する但し慰労金を支給された住職は該当しない

○真宗教学奨学金（毎年4 月末日までに申請のこと）

- ・ 高等学校生及び真宗各派の専修学院生 月額 2 万円 若干名
- ・ 大学生及び大学院生 月額 4 万円 若干名  
月額 8 万円 若干名

○奨励金（毎年4 月末日までに申請のこと）

共済会が指定した学校学部にて得度した者が入学したときに

4 万円を支給します。

給付及び申請のお問い合わせは、下記の共済会担当までお尋ねください。

真宗高田派共済会 真宗高田派宗務院内

電 話 0 5 9 - 2 3 2 - 4 1 7 1 F A X 0 5 9 - 2 3 2 - 1 4 1 4

鍵長は  
仏教の歴史と共に 幾百年  
優良な品質と卓抜せる技術の所有者  
鍵長は  
仏教工芸 有識故実の伝承者の  
誠意の店の 世評にたがわず  
鍵長は  
皆様のご用命をお待ち致して居ります

高 田 本 山 御 用 達

# 鍵長法衣仏具店

京都市下京区油小路通正面東

TEL (075) 3 7 1 - 0 8 5 4 8 1 8 1

FAX (075) 3 4 4 - 2 7 0 1 振替口座：京都7-972番

法衣・仏具製造及び販売

代表取締役社長 今岡規代  
●本社

600-8468

京都市下京区堀川通

新花屋町角(西本願寺前)

Tel 075-351-1234

☎ 0120-075-720

Fax 075-341-7905

●東京店

160-0008

東京都新宿区四谷

三栄町十四番地11

Tel 03-3358-1500

Fax 03-3359-8902



井筒法衣店

オンラインショップを開設しました



石を生かして心の時代を創造する



高田本山御用達  
三重県仏教会御推薦



高級御影石専門店

御影石材株式会社

〈石にご用の方は〉

イシニゴヨオ

☎0120-142540

本店 津市広明町1007番地の1  
☎059-224-1700代

あなたの「大切」を、セコムする。



セキュリティをご検討の方はセコムまで

信頼される安心を、社会へ。

SECOM

☎ 0120-756-892

受付時間：9時～18時（年末年始除く）

## 最新刊

### 往生論註詳解

宇野惠教著

定価15400円(税込)

『論註』テキストを一頁三段で構成した《資料篇》と、『論註』本文を百十の小文に分け、現代語訳、筆者の研究成果・理解・問題提起などを挙げている《本文篇》の二冊本。《本文篇》では歴史篇として、羅什三蔵の訳経から曇鸞大師示寂までの仏教および浄土教の発展も概観する。

### 讃阿弥陀仏偈和讃講義

恭敬をいたし歌喚す

井上見淳著

定価7150円(税込)

本書は高田派専修寺蔵国宝本を底本に、『総説篇』で和讃を講じるにあたって成り立ちや書誌情報について概説し、『講讀篇』で『讃阿弥陀仏偈和讃』四十八首の本文と、巻末附録にて文明本の冠頭讃二首について解説する。

### 吉蔵撰『観無量寿経義疏』講読

能仁正顕著

定価5500円(税込)

『大正新脩大蔵経』第三十七巻・經疏部五所収の『観無量寿経義疏』を底本とし、漢文テキスト、書き下し文、解説、注によって構成される。また、序論にて吉蔵の生涯や著作にも触れる。

龍谷大学仏教文化研究叢書 57

### みんなちがって、みんないい。 金子みすゞの童謡にみる命の尊さ

鍋島直樹・古荘匡義編

定価2750円(税込)

金子みすゞの生涯と童謡にみる命の尊さを、作品を紹介しながら解説する。主なテーマとして、仏教生命観、あらゆるものの慈しみの源泉、仏教死生観と悲しみの中で見出す光、大正生命主義など。

永田文昌堂

600-8342 京都市下京区花屋町通西洞院西入 TEL 075-371-6651 FAX 075-351-9031

## 人権擁護啓発活動重点項目

- 一、国際時代にふさわしい人権意識を育てよう。
- 一、子どもの人権を守ろう。
- 一、高齢者の人権を尊重しよう。
- 一、病気・部落などによる差別をなくそう。
- 一、障害者の完全参加と平等を実現しよう。

「三重県人権教育基本方針」より抜粋

令和八年八月二十日印刷  
令和八年八月二十日発行

三重県津市一身田町二八一九番地  
電話（〇五九）二三二一四一七一  
<http://www.senjui.or.jp>

真宗高田派本山専修寺

発行所  
**宗務院**

振替〇〇一五〇〇一五一九四番

三重県津市一身田町七六五番地

印刷所  
**相和印刷所**

電話（〇五九）二三二一〇七〇

パスワード TA21da61（半角英数文字です）



高田本山

せんじゅじ

専修寺

しちや

たけ

お七夜竹あかり

令和九年一月九、十五日点灯  
制作・演出 川渕皓平氏

あなたの竹あかりでやすらぎの光を灯しましょう。

作品募集

募集  
期間

2026 年

7/10(金)～11/10(火)

詳細は本山 HP の竹あかり特設サイトをご確認ください。

<http://www.senjiji.or.jp/tebakan/>



【お問い合わせ先・お申し込み先】

■〒514-0114 三重県津市一身田町2819  
専修寺竹あかり実行委員会  
TEL 059-232-4171

■受付窓口 真宗高田派宗務院 専修寺内 9時～16時

